

## 学位論文審査の要旨

	石井 友美【論文博士】 【比較社会文化学専攻 平成20年度生】 (平成26年3月31日単位修得退学)	要 旨
学位申請者		<p>本研究は、現代中国語におけるいくつかの副詞を取り上げ、異なるタイプの疑問文、アスペクトを表す表現、モーダルを表す表現との共起状況から、副詞の意味及びそれらの表現の差異を明らかにしている。</p>
論文題目	現代中国語における副詞の共起制限-焦点、アスペクト、モダリティの関連を通して	<p>第1章で研究の意義、範囲が述べられた後、第2章では、“只(~だけ)”、“也(~も)”、“都(すべて)”などの意味指向副詞が取り上げられ、疑問文のタイプによってこれらの副詞との共起状況が異なることが指摘された。即ち、中国語には、終助詞を使う疑問文(“吗”疑問文)と動詞の肯定形と否定形を並列する疑問文(正反疑問文)があるが、前者のみ意味指向副詞と共起でき、後者はできない。この違いは、前者では疑問の焦点の位置が自由であるため、焦点を意味的に指向する副詞との共起が可能だが、後者では、疑問の焦点が動詞に固定されるため、共起が不可能になると説明された。第3章では、完了や暫時を表すアスペクト副詞を取り上げ、将然のアスペクトを表す表現“就要……了(すぐに~になる)”と“快要……了(まもなく~になる)”の違いを明らかにした。即ち、前者は完了のアスペクト副詞と共起するが、後者は暫時のアスペクト副詞と共起する。これは、それぞれのアスペクト構造上の注視点が異なり、前者は終点に注視点を置くが、後者は動作の速度に注視点を置き、その注視点と一致するアスペクト副詞をそれぞれ選択するためであると説明した。第4章では、感情のモダリティを表す副詞を取り上げ、それらが意志を表す助動詞“愿望(どちらかというと~したい)”と“想(~したい)”の違いを明らかにすることを述べた。これらの助動詞には、感情のモダリティを表す副詞が後者とのみ共起し、前者と共起しないという違いがある。この違いは、前者は選択性の意志を表すのに対し、後者は未定の意志を表し、後者のみが感情のモダリティを許す余地を持つからであると説明した。第5章では、第2章~第4章の研究をまとめ、今後の展望を述べている。</p> <p>博士論文の審査は、2回にわたって行われた。1回目の審査委員会では、委員より、論文全体を通しての研究意義が明確でないこと、第2章での副詞の焦点についての先行研究の紹介が、申請者本人の説明と矛盾する点があること、章により、異なる用語が使われており、用語同士の関連性が明らかでないこと、総括として、様々な共起制限は副詞の多様性から説明できると述べているが、結論として弱いことなどが指摘された。これらの指摘を受けて、本申請者は博士論文を修正し、各章の研究意義が明確になり、用語の差異も明確になった。</p> <p>最終試験を兼ねた公開発表会では、論文全体を明確に述べ、聴衆からの質疑に対しても一つ一つ丁寧に答えることができていた。そこで、本申請者に博士(人文科学)、Ph. D. in Linguisticsを授与できると判断する。</p>
審査委員	(主査) 准教授 伊藤 さとみ	
	教授 伊藤 美重子	
	教授 宮尾 正樹	
	教授 和田 英信	
	准教授 中西 公子	
インターネット公表	<p>○ 学位論文の全文公表の可否 ( 可 ・ 否 )</p> <p>○ 「否」の場合の理由</p> <p style="margin-left: 20px;">ア. 当該論文に立体形状による表現を含む</p> <p style="margin-left: 20px;">イ. 著作権や個人情報に係る制約がある</p> <p style="margin-left: 20px;">ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている</p> <p style="margin-left: 20px;">オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている</p> <p>※ 本学学位規則第24条第4項に基づく学位論文全文のインターネット公表について</p>	